

## CONTENTS

●年次報告書の刊行にあたって	2
■国際シンポジウム	3
ジェンダーセンター開設 10 周年記念シンポジウム	
「21 世紀の多様性と創造性——学術・アート・ファッションにおける新展開」	4
プログラム	5
総括	8
パート1 ジェンダー研究の新展開——この10年と今後:パネルセッション	9
パート2 デジタル社会の多様性と創造性——アートとファッションの新展開	
:パネルセッション(アート)	10
:パネルセッション(ファッション)	11
■定例研究会	13
「海外研究者から見た日本の少女文化とジェンダー研究」	14
■上映会	17
映画『his』プレミア試写上映会+トークセッション	18
■学生企画イベント	23
映画『ウリハッキョ』上映会+トーク	24
■他機関との連携・協力	29
共催 アカデミックフェス 2019	
「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」	30
共催 「「SOGI の多様性に関する学長共同宣言」+1」:成果と課題を議論する	32
共催 明治大学大学院情報コミュニケーション研究科特別講義	
「Advertising and Gender Representation 」	33
後援 「2019 年度 名古屋 LGBT 成人式」	34
国際交流事業 「第 6 回ジェンダーフォーラム」	35
■研究プロジェクト	37
A「組織におけるダイバーシティ・マネジメント」	38
B「「ヤンキーママ」の互助的ネットワークの実態調査」	39
C「デジタルメディア時代において多様化する「規範」的ファッションとそれを通して 構築・伝達されるジェンダー像についての考察」	40
D「現代メディアとアートにおけるジェンダーとダイバーシティ」	41
■業績一覧	43
ジェンダーセンター運営委員業績一覧	44
●ジェンダーセンター運営委員一覧	47
●ジェンダーセンター運営委員会会議録	48
●編集後記	49

## 年次報告書の刊行にあたって

2019年度の年次報告書ができあがりました。無事にお届けできますこと大変嬉しく思います。というのも今年度は設立10周年の年に位置付けられ、これまで以上に緊張感を持ってセンターの運営・活動に取り組んできたからです。

本センターは2009年に活動をスタートしました。厳密にはその年は「設立準備年」で、翌2010年4月に正式に発足しました。しかしながら準備年にはすでに4回の定例研究会（2009年7月3日、10月7日、11月20日、11月27日）と国際シンポジウム（2010年3月22日）を開催するなど、活発に活動していました。また設立に関わられた学内関係者のご苦労・ご尽力についても伺ってきました。そのことも踏まえ、準備年から数えて10年目にあたる2019年度に設立10周年記念行事を催すべく、2018年度から構想を練ってまいりました。その結果、メインイベントとして「21世紀の多様性と創造性」をテーマとする学際的かつ国際的なシンポジウムの開催を企画しました。

企画にあたっては次の2点を意識しました。まず本センターの活動のバックボーンであるジェンダー研究を振り返る機会を作ることです。ジェンダー研究とその担い手としてこの研究領域を作ってこられた先人たちに対して敬意を表し、かつその取り組みを継承するようなものを盛り込みたいと考えました。内容的には近年の新しい研究動向を捉え、今後のあり方を批判的に検討するようなものとなるよう意識しました。加えて、ジェンダーだけでなく様々な社会的差異について考えることがジェンダー研究にとっても必要不可欠であるとの認識の下、より広い意味で差異や多様性について考える機会を作ることです。この点については、これまで国内の大学のジェンダー関連のセンターではあまり大々的に取り上げられてこなかったアートやファッションといった分野におけるデジタル化・多様性・創造性に関する動きを論じることを企図しました。芸術系学部を持たない本学においては新しい試みでしたが、学内外で多くの方々の協力を得たことにより、実現することができました。

今や本センターは学内では学部等部署の垣根を超え、学外では他大学や様々な団体や個人の方々と分野の垣根を超えた「つながり」を獲得するに至っています。設立10周年記念シンポジウムだけでなく、2020年1月に開催されたICUのジェンダー研究センター、名古屋テレビ株式会社との共催イベントにおいても、こうしたネットワークの広がりの一見を見ることができます。本センターのこれまでの10年の軌跡のなかで今年度の活動を振り返る過程で、このような信頼と協力関係に基づく「つながり」を再確認できたことは大きな喜びでした。この場を借りて、学内外の関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。と同時に、このような「つながり」が今後も本センターの活動に、またよりよい社会の構築に活かされることを願います。

2020年2月25日

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター長  
田中洋美

 国際シンポジウム

## 21 世紀の多様性と創造性

—学術・アート・ファッションにおける新展開

**Diversity and Creativity in the 21st Century:**

**New Directions in Science, Art, and Fashion**

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター  
 【共催】 明治大学大学院情報コミュニケーション研究科  
 【後援】 明治大学国際連携本部  
 【協力】 明治大学特定課題研究ユニットジェンダー・セクシュアリティ研究ネットワーク  
 【日時】 2019年9月20日（金）13:00～18:15（開場12:30）  
 2019年11月14日（木）18:30～20:30（開場18:00）  
 2019年11月15日（金）17:00～21:10（開場16:30）  
 【会場】 明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント1階グローバルホール  
 【URL】 <https://gc10.localinfo.jp/>（特設サイト）



ポスターデザイン : konomi K.

## プログラム

### パート 1

ジェンダー研究の新展開—この 10 年と今後

9 月 20 日 (金) 於・駿河台キャンパス グローバルホール

### Part 1

**New Directions in Gender Studies: The Past Decade and the Future**

**September 20, Global Hall, Surugadai Campus, Meiji University**

- 13:00 開会, 挨拶, 趣旨説明  
大黒 岳彦 (明治大学情報コミュニケーション学部長)  
須田 努 (明治大学大学院情報コミュニケーション研究科長)  
田中 洋美 (明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター長)
- 13:15-15:30 オープニングセッション: 日本の文脈と比較の視点
- 13:15-14:00 基調講演 1  
「日本における近年のジェンダー研究の展開—非正規化と多様化の中で」  
...江原 由美子 (横浜国立大学教授)
- 14:00-15:00 基調講演 2  
「ジェンダー研究の新展開—フェミニズム, 多様性, プロセス的インターセクショナルリティ (New Directions in Gender Studies: Feminism, diversity and processual intersectionality)」  
...イルゼ・レンツ (独ルール大学ボーフム名誉教授)
- 15:00-15:30 質疑応答  
司会: 田中 洋美 (明治大学准教授)
- 15:30-15:45 休憩
- 15:45-18:15 パネルセッション: ジェンダー研究の新展開—各領域からみて (各 20 分 + ディスカッション)  
登壇者:  
「アメリカ研究・ジェンダー史」...兼子 歩 (明治大学専任講師)  
「メディア・表現」...藤本 由香里 (明治大学教授)  
「セクシュアリティ」...風間 孝 (中京大学教授)  
「スポーツ・身体」...來田 享子 (中京大学教授)  
「暴力・ハラスメント」...牟田 和恵 (大阪大学教授)  
司会: 高峰 修 (明治大学教授)

※登壇順

パート2

デジタル社会の多様性と創造性——アートとファッションの新展開  
於 駿河台キャンパス グローバルホール

**Diversity and Creativity in the Digital Society: New Directions in Art and Fashion**  
**Global Hall, Surugadai Campus, Meiji University**

11月14日(木)

オープニングセッション

デジタル社会の多要性と創造性

**Diversity and Creativity in the Digital Society**

- 18:30 開会, 挨拶, 趣旨説明  
大黒 岳彦 (明治大学情報コミュニケーション学部長)  
須田 努 (明治大学大学院情報コミュニケーション研究科長)  
田中 洋美 (明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター長)
- 18:45-19:00 基調講演1「人間以外の死をめぐるテクノロジー」  
...渋谷 慶一郎 (アーティスト, 音楽家)
- 19:00-19:15 基調講演2「メディア論とアートの変容」  
...大黒 岳彦 (明治大学教授)
- 19:15-20:30 座談会:  
渋谷 慶一郎 (アーティスト, 音楽家)  
大黒 岳彦 (明治大学教授)  
四方 幸子 (キュレーター, 多摩美術大学客員教授・東京造形大学客員教授)  
司会: 田中 洋美 (明治大学准教授)

11月15日(金)

アートとファッションの新展開

**New Directions in Art and Fashion**

- 17:00 2日目挨拶  
土屋 恵一郎 (明治大学学長)
- 17:05-19:20 パネルセッションⅠ：生命・身体・社会へ——境界を問うアートの新地平  
**Panel Session I: Life, Body, Society: New Frontiers of Arts  
interrogating Boundaries**  
登壇者：  
森永 邦彦 (ANREALAGE (アンリアレイジ) デザイナー)  
シャルロット・クロレック (南デンマーク大学教授)  
岩崎 秀雄 (早稲田大学教授, アーティスト)  
シュー・リー・チェン (メディアアーティスト, 映像作家)  
司会: 四方 幸子 (キュレーター, 多摩美術大学客員教授, 東京造形大学  
客員教授)
- ※登壇順
- 19:20-19:30 休憩
- 19:30-21:10 パネルセッションⅡ：日常, アイデンティティ, メディア  
——境界を問うファッションの新地平  
**Panel Session II: Daily Life, Identity, Media: New Frontiers of  
Fashion Interrogating Boundaries**  
登壇者：  
アニエス・ロカモラ (英ロンドン芸術大学教授)  
小石 祐介 (クリエイティブディレクター, KLEINSTEIN 代表)  
門傳 昌章 (豪西オーストラリア大学講師)  
司会: 高馬 京子 (明治大学准教授)
- ※登壇順
- 21:10 閉会

## 21世紀の多様性と創造性——学術・アート・ファッションにおける新展開：総括 報告：田中 洋美（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

2019年秋、明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターは設立10周年記念イベントとして国際シンポジウムを開催した。「21世紀の多様性と創造性——学術・アート・ファッションにおける新展開（Diversity and Creativity in the 21st Century: New Directions in Science, Art, and Fashion）」と題した本シンポジウムは、多様性に肯定的な意味を付与する時代における文化創造について学際的に論じるもので、以下に述べるように二部構成で開催した。

9月20日（金）に開催された第一部「パート1 ジェンダー研究の新展開——この10年と今後」においては、多様性に関する議論をリードしてきた学術領域であるジェンダー研究を取り上げ、近年の新たな研究動向を明らかにし、これまでの到達点と残る課題について議論した。ジェンダー研究を牽引してきた日独の研究者（江原由美子横浜国立大学教授、イルゼ・レンツ独ルール大学ボーフム名誉教授）による基調講演により、日本およびヨーロッパの近年の社会変動とそこにみられるジェンダーやそれと関わる差異の問題を確認すると共に新たなジェンダー分析の理論やアプローチが確認された。後半のパネルセッションでは、歴史、表象、セクシュアリティ、暴力、身体・スポーツの5つの領域を取り上げ、それぞれに関する最新の理論・実証研究の知見が紹介され、喫緊の課題を可視化すると共にその解決に資する研究のあり方について活発な議論がなされた。

11月14日（木）・15日（金）に開催された第二部「デジタル社会の多様性と創造性——アートとファッションの新展開」においては、多様化に肯定的な意味を付与する動きが社会のデジタル化と同時期に起きていることを踏まえ、領域横断的な越境的創造性がいかにして発揮され、新しいクリエイションが起きるのか、またそこに新たな技術がどのように関わっているのかについて議論が行われた。初日オープニングの基調講演では、創造的営みの実践者（アーティスト、音楽家の渋谷慶一郎氏）による斬新な芸術作品の紹介とそれら作品のコンセプトが提示されると共に、哲学者としてメディア論を専門とする研究者（大黒岳彦明治大学教授）が、メディア論的・技術論視点から美術の展開を振り返ると共に、アートの意義を示した。続く座談会では、キュレーター（四方幸子氏）に加わっていただき、越境的創造性が発揮される条件について議論が行われた。二日目は、アートとファッションに関するセッションが行われた。いずれにおいても研究者と実践者が登壇し、かつ文理融合の学際的な議論となった。

パート1、パート2どちらも1日につき100人以上を超える来場者があり、盛会であった。多様なデジタル社会においていかなる文化と価値を生み出すのか、という大きな問いについて学術的かつ実験的に論じる貴重な機会となった。



パート1 ジェンダー研究の新展開——この10年と今後：パネルセッション  
報告：高峰 修（明治大学政治経済学部教授）

2 題の基調講演に続き、パネルセッション「ジェンダー研究の新展開—各領域からみた新展開」では5名の登壇者による報告があった。

兼子歩氏（明治大学政治経済学部専任講師）からは「アメリカ史／ジェンダー史の新潮流」と題し、1970年代以降に米国で盛んになった女性史研究からジェンダー史研究への



トークセッション時風景

の発展について、そして近年のジェンダー史研究の重要な研究動向について報告があった。後者については2点あり、1点目は「インターセクショナル」な歴史研究、つまりジェンダーと人種など他の社会的要素が交錯することによって生じてきた諸問題を検討する歴史研究であり、2点目はアメリカ政治史にジェンダーを組み込む叙述である。これら2点の研究動向について、具体的な事例が示されながら説明があった。

藤本由香里氏（明治大学国際日本学部教授）は「表象・メディア」の視点から、特に少女マンガにみられる LGBT をめぐる表現に着目した報告があった。少女マンガにおいては1970年代初頭から既存のジェンダー秩序を問い直すような作品が発表されていたが、近年では現実とフィクションの懸け橋になるような作品が次々と生まれてきているという。さらに2000年代半ばからは、男性文化への女性文化の取入れが進んできたとの指摘もあった。

風間孝氏（中京大学国際教養学部教授）は日本における「セクシュアリティ」をめぐる動向について概観された。日本において男性同性愛者は1980年代半ばにエイズ危機の中で可視化されたが、その後も真剣な議論の対象にはならず、社会から排除され、あるいは国家にとっての脅威として捉えられていた。こうした風潮が変化するのは2010年代に入ってからであり、性的マイノリティは経済の領域では可処分所得を多く持つ消費者として注目され、政治の領域では現政権から包摂される存在へと変化した。しかし一方では自民党杉田衆議院議員による差別発言もあり、そうした動向の矛盾を「寛容な日本」という言説から分析し、さらにその「寛容」にも境界線があること等を指摘された。

来田享子氏（中京大学スポーツ科学部教授）からは「スポーツ・身体」領域における研究の動向について、2000年以前と以降の時期に分けて説明があった。スポーツにおける「性別」を<指標>と<境界>という2つの概念に整理し、それぞれの変化についての分析結果、国際オリンピック委員会のジェンダー平等政策の分析結果、オリンピック・パラリンピック関連データと Gender Gap Index を照らし合わせた分析結果等が紹介された。今後の提言としては、①スポーツ領域におけるジェンダー平等のための戦略を社会のジェンダー

平等へとつなげる方法論，②既存の社会統計とジェンダー研究の成果の融合，の2点が示された。

牟田和恵氏（大阪大学大学院人間科学研究科教授）は「性暴力・ハラスメント：研究と運動の往還」と題して，過去25～30年間にわたる日本の性暴力およびハラスメント問題の展開を振り返った。このテーマは，ジェンダー研究の中でも特に研究が運動や実践と往還しつつ展開した分野でもある。1989年に登場した「セクハラ」概念の法制化はすみやかに進んだが，女性差別という観点は抜け落ちていた。2017年には刑法177条改正が実現し，MeToo運動が起こったが，2019年3月には性暴力無罪判決が相次いだ。このことは法曹界の性暴力への理解が進んでいないこと，性暴力を告発することに対する反動が未だ存在することを表わしている。最後にこうしたことから，セクハラや性暴力問題を根源的に解決するためには社会における「女性差別」自体の撤廃が不可欠である，という指摘があった。

2時間30分という限られた時間で5名の報告を設定したため，各報告に十分な時間を確保できなかったのは企画側の反省点である。しかしそうした条件の中で，各登壇者は各領域における現象や研究の動向，そして今後の課題を要領よくまとめてくださった。幅広いジェンダー研究の領域の話しをまとめて聞けるという点で，これまでの企画にはない楽しさを来場者に体験していただけたのではないだろうか。今回のパネルセッションが，今後の各領域における研究の発展につながることを期待したい。

## パート2 デジタル社会の多様性と創造性

### ——アートとファッションの新展開：パネルセッション（アート）

報告：四方 幸子（キュレーター，多摩美術大学客員教授，東京造形大学客員教授）

「生命・身体・社会へ——境界を問うアートの新地平」と題した本セッションは，科学技術の飛躍的進展と日常への浸透によって表現を拡張するアートの最前線と，ジェンダー研究における実践をともなう領域の拡張が，近年接点を生み出している状況を未来に向けて確認する場となった。

ファッションの領域で様々な境界の越境に挑戦する森永邦彦（ANREALAGE デザイナー）は，光を当てると色が変わる服（波長を感じる服），

目の視えない人が空間との距離を知覚できるセンサー搭載の「echo wear」（身体器官としての洋服），生分解される服などを実物を含めて紹介，「Umwelt（環世界）」（ユクスキュル）を挙げながら，異なる知覚世界，多様性を前提とする姿勢を語った。

シャルロッテ・クロレック（南デンマーク大学教授／skype参加）は，「21世紀のフェミ



トークセッション時光景

ニスト・カルチュラル・スタディーズ」という観点から、人工的な冷却による生や死、若さや老いの再定義、またそれを追求する美や科学技術の果てない欲望を、cryo-art(超低温保存技術)の事例を挙げながら発表した。

岩崎秀雄(早稲田大学教授,アーティスト)は、自身が実践する生命美学やバイオ(メディア)技術の探求においては自然科学と芸術(アルス)がクラインの壺のように互いを包摂(反転)するような関係にあるという考えを提示した。挙げられた3つの事例(研究や制作のための場 MetaPhorest, バイオメディアアート作品「Culturing <Paper>cut」, 先端科学技術研究の背後にある生命性を検討するプロジェクト「aPrayer: 人工細胞・人工生命の慰霊」)は、いずれもアートとサイエンス, 理論と実践を往還するものであり、それらを通して岩崎は、クラインの壺の比喻に戻り、「生物は、外的世界を内部表示する活動でもある」と結んだ。

シュー・リー・チェン(メディアアーティスト, 映像作家/パリ在住)は、監獄から現代のデジタル監視システムに至るまで、性的主体性が監禁や統制のテクノロジーによって構築されることを批判的に扱う新作メディアアート・インスタレーション《3x3x6》(ヴェネツィア・ビエンナーレ 2020 台湾代表作品)を紹介しながら、ジェンダーとセクシュアリティの問題について述べた。

各発表は、いずれも人間と環境, 自然と人工の境界を問い直す視座をもち、現在急速に進行しつつあるデジタルネットワークや生政治, そしてその内面化に対してアートを介して異化を試みるものであった。議論では、環世界や脱人間中心性的な側面で森永と岩崎が、ジェンダーや生政治の側面でクロレックとチェンが接続されるなど、領域横断的な各自の活動が新たに領域を超えて交差することが確認された。それとともに、アートを現代社会の諸問題を批判的に検討する開かれた場と見なすビジョンが共有された。

## パート2 デジタル社会の多様性と創造性

### ——アートとファッションの新展開：パネルセッション(ファッション)

報告：高馬 京子(明治大学情報コミュニケーション学部准教授)

本セッションでは、ファッション研究の最前線で活躍する3人のパネリスト、ロンドン芸術大学ロンドン・カレッジ・オブ・ファッションのアニエス・ロカモラ氏、クリエイティブディレクター/KLEINSTEINである小石祐介氏、西オーストラリア大学門傳昌章氏とともにデジタル社会におけるファッションをテーマに議論した。まず報告では、アニエス・ロカモラ氏が「#parisienne:パリジェンヌ像にみるソーシャルメディアの階層化」において、ソーシャルメディアにおいて構築されるパリジェンヌ表象に見られる規範を再生産する装置としてのハッシュタグ(#)とアルゴリズムの役割について、具体的事例で検討し、フ

ファッションのハッシュタグはいかに社会を分類していくのかについて報告した。続いて小石祐介氏は、「離散化する社会と意味の相転移—「正しさ」の変容する時代に」において、社会現象の一部であるファッションを衣服や個の身体の議論ではなく、人の振る舞い+装いの様相として「様装」として捉えることで近年の社会の社会現象としてのファッション（様相）の動きが見えてくるとし、ロラン・バルトのファッション記号論での意図を現代の形で拡張する緒を探る報告を展開



トークセッション時光景

した。門傳昌章氏は、「境界の問題：階級、文化とカワイイの逸脱の可能性」において、ファッションから見た階級、年齢、そしてジェンダーの逸脱の可能性について、ファッション学、歴史的視点から、特に、かわいいというコンセプトとファッションモデルという事例を通して、ファッションにおける「逸脱, transgression」について検討した。それらの報告を踏まえ、今日デジタルメディアの発展する高度情報社会において、以下の問い、①ファッションはどのように変容したのか、②今、ファッションを身につけて私たちはなにになろうとする／させられるのか、③ファッションメディアは個人にとって多様な自分らしさを提言するエンパワーメント空間になったのか、④デジタルメディア時代のファッションを論じるためにいかなる方法論、アプローチが有効なのか、⑤現場とアカデミズムの協働はいかに可能なのか等、本テーマに関連する問いについて



トークセッション時光景

討論を展開し、アートと異なり、消費、生産、経済といった側面からも大きく条件づけられるデジタル時代の境界を問うファッションの新地平について議論した。

 定例研究会

海外研究者から見た  
日本の少女文化とジェンダー研究  
Overseas Researcher Views on Gender Studies and  
Shōjo Studies in Japan

**【講演者】** デボラ・シャムーン氏

(シンガポール国立大学日本学研究科准教授)

**【略歴】** アメリカ東海岸出身。十代の頃に初期の日本漫画の翻訳に触れて研究の道を志し、カリフォルニア大学バークレー校で PhD を取得。現在はアジアのトップ大学であるシンガポール国立大学の日本研究科で日本のポップカルチャーを含む日本文化を教えている。とくにジェンダー問題には造詣が深く、専門の科目を担当するほか、「Passionate Friendship: The Aesthetics of Girl's Culture in Japan」の著書もある。

**【主催】** 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

**【共催】** 明治大学研究者交流支援制度 (Researcher Mobility Grant)  
明治大学国際日本学部

**【日時】** 2019年6月17日(月) 18:30~20:30 (開場 18:00)

**【会場】** 明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント1階グローバルホール

**【司会】** 田中 洋美 (明治大学情報コミュニケーション学部准教授)

**【コーディネーター】** 藤本 由香里 (明治大学国際日本学部教授)

**【来場者数】** 98名

**報告:** 藤本 由香里 (明治大学国際日本学部教授)

今回の定例研究会では、明治大学研究者交流支援制度招聘プログラム (2019年度春学期申請者: 藤本由香里) によって招聘された、シンガポール国立大学准教授のデボラ・シャムーン氏を講師としてお招きし、「海外研究者から見た日本の少女文化とジェンダー研究」というテーマでお話をいただいた。

シャムーン氏はカリフォルニア大学バークレー校で PhD を取得したのち、シンガポール国立大学日本学研究科で日本文学・日本文化を教えている。とくにジェンダー問題には造詣が深く、日本の明治~大正期の少女文化に注目した単著 *Passionate Friendship: The*

Aesthetics of Girl's Culture in Japan もあるほか、同大学でジェンダー関連の授業も行っている。本講演では、少女文化やポップカルチャーのみならず、おもに江戸時代からの日本文化における男同士の愛・女同士の愛の表象とその構造、その後のさまざまな展開過程を、19世紀・20世紀における日本独自の近代化の経験と捉え、霸権的な西洋のセックス・ジェンダー観への挑戦・対比という視点から語っていただいた。

冒頭では、米国の人類学者イアン・コンドリーの“Love Revolution: Anime, Masculinity and the Future”

(Recreating Japanese Men に収録)における、日本のオタク男性に着目することは、「男性性」を問い直すことに

つながるとい言説を引き、ジェンダー研究は女性を研究するだけでは不十分で、男性性の研究も重要であることが語られた。

日本の歴史的なクィア文化の研究が西洋的な見方とは違う新しい知見を開いてくれる例として、カナダの学者 Mostow が企画・監修し、公開された *wakashu as a third gender*(第3の性としての若衆)という展覧会とその解説の重要な部分が紹介され、江戸時代の若衆文化が男色を当たり前なものとしながらも、構造としては「大人の男性」なら性愛の相手に女性も男性も選ぶことができるという成人男性のヘゲモニーを前提としており、現在のセクシュアリティの自由とは基本的に違うことが指摘された。こうした文脈の中では、同じ男性同士の性愛と言っても、現代の用語であるゲイやホモセクシュアルという言葉ではなく、「若衆」「男色」といった歴史的に正確な用語を使う必要がある、との指摘は非常に重要である。

続いて Ayako Kano による著作 *Acting Like a Woman in Modern Japan: Theater, Gender, and Nationalism* および L.スティックランドの宝塚の研究書に基づいた、歌舞伎・宝塚などの男性だけ・女性だけの演劇の研究へと進み、「ジェンダーはパフォーマンスである」とするジュディス・バトラーの言葉を紹介。しかし近代西洋文化においては、パフォーマンスとしてのジェンダーは国家を不安定にさせるものとして驚異とみなされたという。これに対し、日本文化においては、ジェンダーは常にパフォーマンス的なもの、身体の性別とは別ものとして演じられうるもの、という潜在的な認識があったのではないか。この発見は、報告者にとって非常に興味深いものであった。

話題は宝塚から少女文化へと進み、とくにその中に見られる女性同士の強い絆に焦点が当てられ、*Passionate Friendship* と題されたシャムーン氏自身の著作・研究の概要が紹介された。氏は、本田和子のいう「ひらひら」の美学を体現するものとして、1920年代・1930年代の少女文学雑誌から1970年代の少女漫画までを研究し、20世紀の少女文学とイラストレーションのナラティブ、美学的特徴を分析している。氏はまた、少女雑誌のテキストが



少女たちにいかに語りかけ、いかにして読者コミュニティが形成されていったかを語り、少女達は女学校文化を背景として、自分たち独自のサブカルチャー、少女文化を作り上げていったと指摘する。これらの「少女だけのコミュニティで形成された少女独自の文化」はアメリカにはないものであり、その中で形成された「女性同士の情熱的な絆」もまた、今日のレズビアンとはまた別の文脈で捉えられなければならない。

しかし、こうした女性たちが作り上げた「女性同士の強い絆」の文化は、やがて谷崎潤一郎『卍』などに取り入れられ、川端康成においても、のちに中里恒子の代作だったことがわかった『乙女の港』、そして『美しさと哀しみと』にも援用されていく。その際、少女文化の当事者ではない男性作家たちは、自分たちが描けない「少女言葉」を作品に取り入れるために、谷崎は少女言葉を修正する役割の若い女性を雇い、川端はのちに作家・中里恒子となる少女の作品を自分の名前で発表した。「中里の作品に川端の名を冠することで、彼が彼女から奪ったものは、その言葉を話す主体としての位置だったのである」とシャムーン氏は指摘する。『卍』も『美しさと哀しみと』も男性監督の手で映画化されているが、その際にはさらに女性同士の関係は後景に退き、異性愛規範が強くなり、性的な記号としての女性の搾取が行われ、男性による少女文化のさらなる占有が行われた。この占有化の過程について、マーク・マクレランド **Queer Japan from the Pacific War to the Internet Age** なども引きつつ、非常に詳しい分析がなされた。これらの一連の議論は、少女文化を近代日本文学・映画史の中に改めて位置付けなおす試みであり、これまでなされてきた少女文化のこうした矮小化や周縁化は、若い女性の問題や芸術的な貢献を無視するだけでなく、文学作品の理解をも不十分なものとする、とシャムーン氏は結論付けた。



デボラ・シャムーン准教授

約100名の聴衆が熱心に聞き入っており、その8割以上が、ジェンダーセンターの催しには初めて参加する人だった。英語と日本語で活発に質疑応答が行われ、閉会後も並んで質問する人が長い間途切れなかった。



 上映会

## 映画『his』

### プレミア試写上映会＋トークセッション

- 【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター，  
名古屋テレビ放送株式会社
- 【日時】 2020年1月20日（月）17:30～21:10（開場 17:00）
- 【会場】 明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント 1階グローバルホール
- 【コーディネーター・司会】 田中 洋美  
（明治大学情報コミュニケーション学部准教授，同学部ジェンダーセンター長）
- 【来場者数】 約 170 名
- 【プログラム】
- ・ 出演俳優である宮沢氷魚氏と藤原季節氏による上映前トーク
  - ・ 映画『his』上映（監督：今泉力哉／2020年1月24日公開／127分）
  - ・ 宮沢氷魚氏，IVAN氏（ファッションモデル，タレント），アサダアツシ氏（脚本家，『his』企画・脚本），松岡宗嗣氏（一般社団法人 fair 代表理事），田中洋美准教授（司会）によるトークセッション
  - ・ 質疑応答

#### 【作品概要】

春休みに江の島を訪れた男子高校生・井川迅と，湘南で高校に通う日比野渚。二人の間に芽生えた友情は，やがて愛へと発展し，お互いの気持ちを確認合っていく。しかし，迅の大学卒業を控えた頃，渚は「一緒にいても将来が見えない」と突如別れを告げる。

出会いから13年後，迅は周囲にゲイだと知られることを恐れ，ひっそりと一人で田舎暮らしを送っていた。そこに，6歳の娘・空を連れた渚が突然現れる。「しばらくの間，居候させて欲しい」と言う渚に戸惑いを隠せない迅だったが，いつしか空も懐き，周囲の人々も三人を受け入れていく。そんな中，渚は妻・玲奈との間で離婚と親権の協議をしていることを迅に打ち明ける。ある日，玲奈が空を東京に連れて戻してしまう。落ち込む渚に対して，迅は「渚と空ちゃんと三人で一緒に暮らしたい」と気持ちを伝える。しかし，離婚調停が進んでいく中で，迅たちは，玲奈の弁護士や裁判官から心ない言葉を浴びせられ，自分たちを取り巻く環境に改めて向き合うことになっていく――。

（公式 HP <https://www.phantom-film.com/his-movie/> より引用）

報告：田中 洋美（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

近年、日本でも性的マイノリティ、特に同性愛者が登場するテレビドラマや映画が社会的に話題になることが多くなった。テレビドラマでは、脇役はもとより（2016年に大ヒットしたドラマ『逃げるは恥だが役に立つ』（TBS系）における主人公・平匡の同僚、沼田など）、主役に据え、大ヒットとなったドラマも出てきた（2018年・2019年にシリーズ化され、人気を博した『おっさんずラブ』（テレビ朝日系）など）。また映画でも、洋画ほどではないにしろ『怒り』（2016年）や『劇場版おっさんずラブ～LOVE or DEAD～』（2019年）など作中で同性愛者が中心的な役割を担う作品が制作され、話題となってきた。

これらの作品は主流メディアにおいて長らく象徴的に抹消されてきた性的マイノリティを可視化するものであり、一定の評価を与えることができる。また性的マイノリティ役を人気俳優が演じ、作品が社会的注目を集めるようになったこともセクシュアリティの多様性の受容が進みつつある現在の社会状況を示しているようにみえる。しかしながら全体としてはまだまだ性的マイノリティを描くコンテンツは少ない。例えば国際ジェンダー学会メディアとジェンダー分科会映画班が筆者の学部ゼミ生と共同で実施した調査（「映画におけるダイバーシティ」）によれば、2008年、2018年、いずれの年も興行成績トップ10の邦画のうち性的マイノリティが登場した作品は1作品のみであった。一言でも台詞のある登場人物はそれぞれ135名（2008年）、504名（2018年）であったが、そのうち性的マイノリティは3名（2008年）、1名（2018年）で、いずれも男性同性愛者であった。これは増えたように見えて、多くの人々が観る映画においては今も滅多に登場しないことを意味している。また男性同性愛者の描写については、しばしばコミカルに描かれるなど、バラエティ番組等で既に生成されてきたステレオタイプが強化されていることが懸念される。

このような性的マイノリティのメディア表象の現状にあって、このたび名古屋テレビ（株）が同性愛者を主人公に据えた人間ドラマを映画作品として制作したことは注目に値する。

『his』と題されたこの作品は、男性同性愛者を主人公に、彼とそのパートナーである男性とその子どもの関係を時には生々しく描きつつ、彼らや子どもと子どもの母である女性、彼らが暮らす地方の町の人々、弁護士といった周囲の人々との相互作用、そしてそれを特徴付ける様々な社会問題を描いている。男性が、あるいは同性カップルが子どもを育てることの難しさ、一人親として子どもを育てる女性の苦勞、彼らを取り巻く法制度の問題や、マイノ



(C)2020 映画「his」製作委員会

リティに対して向けられる社会的な眼差しの存在など、様々なイシューについてシリアスに、しかしながら‘さらりと’浮き彫りにしている。この度、本センターでは、この作品を制作した名古屋テレビ(株)と共催し、全国公開に先駆けての特別試写会+トークを実施した。

当日は、主人公・迅を演じた俳優の宮沢氷魚さん、迅のパートナーを演じた藤原季節さんによるサプライズの舞台挨拶の後、本編(英語字幕付き)を上映し、多様性とメディアに関するトークセッションを行なった。トークには主演俳優の宮沢さん、企画・脚本を手掛けたアサダアツシさん、ファッションモデル・タレントのIVANさん、一般社団法人fair代表理事の松岡宗嗣さんに登壇いただき、作品についてのそれぞれの思いや多様性についての見解について様々な立場からお話いただき、議論した。

アサダさんは、企画のきっかけは昔一緒に仕事をしていたゲイの方からの自分が心底楽しめる娯楽メディアを作りたいという要望であったとお話があった。制作にあたっては、地方での聞き取りも含め、入念なリサーチをし、法廷シーンなどもあることから弁護士の南和行氏をアドバイザーに招いている。フィクションではあるものの現実にある性的マイノリティをめぐる社会状況を意識した作りになるよう配慮したという。

主演を務めた宮沢さんは、今回の映画出演の話があったとき是非やらせて欲しいと即答したという。背景には、幼少期から知るゲイの友人の存在がある。人間のセクシュアリティが多様であることは当たり前のことだと思っていたが、大人になるにつれて、必ずしもそうではない社会の現状に気づいたのだという。このような問題意識を持った方が演じる方々の中にもいるということに気づかせてくれる瞬間であった。

MtFのモデル、タレントとしてテレビやラジオ等で幅広く活動されているIVANさんは、個を重んじることの大切さを重視するなど多様性についても発信されている。今回の映画については、当事者であるなしに関わらず、マイノリティと言われる人たちの恋愛物語を観ていただきたいと述べた。そしてご自身の子どもの時のエピソード(他者の目が気になっても母親が常に自分を肯定してくれた等)に触れながら、周りの人々と自分が多少違うとしても自分を愛することを忘れずに、無理をせずに日々楽しく過ごすことの大切さを訴えた。

松岡さんは、本学卒業生であり、在学中からオープンリー・ゲイとしてセクシュアリティの多様性について発信してきた。日本で初めてのアライウィークであった本学のMEIJI ALLY WEEK(2015年開催)の学生実行委員会の代表も務めた人物である。今回の映画『his』については、フィクションではあるものの、日常生活におけるSOGIハラのシーンや裁判のシーンなど様々な場面が「リアル」に描かれており、



トークセッションの様子(松岡氏、田中先生)

非常に心に刺さったと述べた。またこのようにゲイを描く作品が本当の意味で当たり前になると時代が来ることを願いたいとも発言した。それだけ今でも様々な場面において性的マイノリティの当事者にとって生きづらさを感じる部分があるということであり、また性的マイノリティを矮小化することなく描くメディアコンテンツというものがないということなのであろう。加えて、今回の映画は男性同性愛者を描いたが、このような映画がもっともっと話題になれば、今後より多くの制作者が色々な作品を作ろうとし、結果としてゲイだけではなくレズビアンやトランスジェンダーなど他の性的マイノリティを扱ったいろいろな作品が出てくるであろう、そうなることも期待したいとお話があった。性的マイノリティの中の多様性の問題、そしてセクシュアリティとジェンダーの交差性（娯楽メディアにおいて今も見られる女性の象徴的抹消・矮小化との関連性）は、様々な研究が指摘していることでもあり、今後の展開に注目したいところだ。

舞台挨拶、2時間強の作品の上映、休憩を挟んで1時間ほどのトークセッションと長丁場のイベントであったが、100人を超える聴衆はトークの話にも静かに聴き入ってくださった。アンケート内容を見ると、本イベントをきっかけに来場者の多くが多様性について改めて考える機会を得たようである。大学という場においてこのような新たな気づきや学びのきっかけを提供できたことを嬉しく思うと同時に、このような機会を共に作り出すことができたことに対して、この度の共催機関である名古屋テレビ（株）関係者の皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げたい。



 学生企画イベント

## 映画『ウリハッキョ』上映会+トーク

- 【主催】 明治大学在日コリアンサークル映画上映会実行委員会  
(朴祐洋, 金永志, 金起誠, 兪在浩, 李潤玲, 全晃一, 朴悠奈, 屋敷浩伸)  
明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
- 【日時】 2019年6月4日(火) 16:00~19:30 (開場: 15:30)
- 【会場】 明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント1階グローバルホール
- 【主旨】 朝鮮学校「ウリハッキョ」についてのドキュメンタリー映画を通して、まず学校ができた歴史的経緯や朝鮮学校の現状を理解し、在日コリアン自体の認知をうながす。次にトークイベントを通じて「ウリハッキョ」で育った在日コリアン学生の生の声を届けるとともに、参加者からの質問に答えつつ、在日コリアンを身近に感じてもらう機会をつくる。このようなイベント全体を通して、民族や国家をこえた相互理解や相互交流、さらに相手を思いやることやコミュニケーションについて考察を深めたい。
- 【来場者数】 60名
- 【プログラム】
- ・映画『ウリハッキョ』上映  
(監督: キム・ミョンジン(金明俊) / 2008年4月12日(日本公開日) / 131分)
  - ・在日コリアンでもある4名の学生によるトークイベント

### 【作品概要】

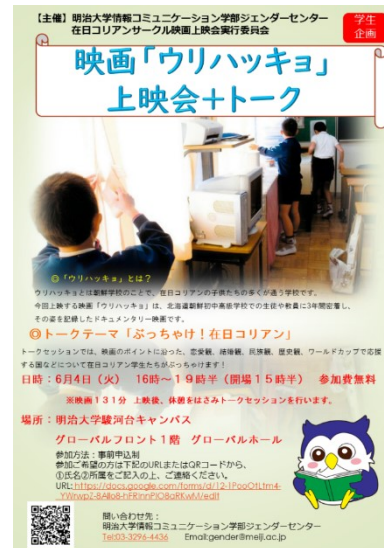
キム・ミョンジン監督による北海道朝鮮初中高級学校での生徒や教員に3年間密着しその姿を記録したドキュメンタリー映画。タイトルの『ウリハッキョ』は朝鮮語で「私たちの学校」という意である。

2006年の釜山国際映画祭のドキュメンタリー部門で最優秀賞を受賞し、韓国では5ヵ月間にドキュメンタリー映画としては異例の8万人を動員した。



報 告：朴 祐洋（明治大学法学部 3 年）

本映画上映会およびトークセッションは、副題に「ぶっちゃけ！在日コリアン」とあるように等身大の在日コリアンたちの姿を明らかにすることを目的として行われた。上映会后、当日の参加者の内 29 名からアンケートを取ることができた。アンケート回答者の内訳は学内生 18 名、学内教員 1 名、学外生 3 名、一般参加者 7 名である。なお、参加者の内、25 名が日本人、3 名が在日コリアンであった。朝鮮学校に通う学生たちの姿を描いた映画を上映し、実際の在日コリアンたちによるアイデンティティから日常生活に至るまで、幅広いテーマの下トークセッションを行うことで上記目的を達成しようと試みた。以下、上映された映画、トークセッションに分けそれぞれの企画について報告する。



映画『ウリハッキョ』は、韓国人映画監督キム・ミョンジン氏が北海道朝鮮初中高級学校での生徒や教員に 3 年間密着しその姿を記録したドキュメンタリー映画であり、タイトルの『ウリハッキョ』は朝鮮語で「私たちの学校」という意である。作中の北海道朝鮮初中高級学校は、いわば日本学校でいう小学校から高校までを一貫教育で実施している学校である。北海道には朝鮮学校がひとつしかないため、北海道全域から生徒が集まり多くの生徒が親元を離れ、学校の寄宿舎で生活を送っている。主に高校生 22 名を追い、学校生活、寄宿舎生活、教員の結婚、部活動、朝鮮民主主義人民共和国への修学旅行など様々な出来事が描かれる。陰に日朝関係や拉致問題がちらつく、平凡とは言い難い彼らの青春を余すことなく描写した作品である。

上映作品に本作を選んだ理由は朝鮮学校の全体像を把握するうえで最も適した作品であったためである。朝鮮学校を題材として取り扱った映像作品は多くあるが、それらの多くは部活動や授業など朝鮮学校の一要素を取り扱ったものばかりである。その点本作は朝鮮学校内での学校生活一般を広く取り扱っており、上述したような本映画上映会の目的を達成するうえで有用な情報を提供してくれると考えた。本作を通して実情の見えづらい朝鮮学校とその周辺共同体の内幕を明らかにし朝鮮学校や在日コリアンに関する、いわば最低限の情報をインプットしたうえで、次に行われるトークセッションにおいても観客の理解の助けになることを企図した。上映会后実施したアンケートでも映画に関して「朝鮮学校の実情、内幕を理解できた」という趣旨の好意的な意見を多くいただくことができた。以下その一部を抜粋する。「朝鮮学校の存在は知っていましたが、実際どのように過ごしているのかは知りませんでした。」(明治大学 3 年生・日本人)「朝鮮学校で生活する学生や教員の日々がよく描写され、内部の状況がわかりやすく作られている映画だと感じました。」(明治大学

4年生・日本人)「昨年卒業論文のために在日コリアンの知人にインタビューした時に聞いた朝鮮学校の話が、実際にどのような感じであるのか映像で観ることができてとてもよかったです。」(立教大学院生・日本人)

上映会の後に行われたトークセッションは、在日コリアンではあるものの違うタイプの経歴を持つ4人の実行委員が登壇し、一人の司会者が4人のトークを取りまとめ、時折質問をはさむ形で進行した。登壇者の4人は四者四様の経歴を持つメンバーで構成し、それぞれで異なる彼らのアイデンティティや在日観を通して幅広くリアルな在日コリアン像を提供することを企図した。その経歴の内訳は、小学校から高校まで朝鮮学校に通っていた者、小学校



トークセッションの様子

まで朝鮮学校に通っていた者、小学校から高校まで大阪の朝鮮学校に通っていた者、また一度も朝鮮学校に通ったことのない者の4名である。その4人それぞれの見解や意見を司会者が整理し、朝鮮学校や在日コリアン独自の風習や慣習など日本人にはわかりにくい点に関して、いわば会場の代表として司会者が適宜補足説明を促した。

トークセッションで、実際に議題に上がったものは映画で描かれていた朝鮮学校での学校生活に関することに加え、結婚観や祖国観、さらに事前に参加者から募集した質問に関することまで多岐に及んだ。その際に、先に述べたように四者四様の経歴の登壇者たちを配したことが、多様な在日コリアン像を理解する一助になったと言える。例えば、国籍観一つをとっても、日本を重視する者もいれば、理想としての統一朝鮮を重視する者もあり、それぞれの視点や人生観を窺い知ることができ、非常に興味深い内容であったと思う。上映会後のアンケートでも「在日の方のアイデンティティや民族そのものに対する感情、態度について理解が深まり、見方がかなり変化しました。」(明治大学4年生・日本人)といった意見をいただいた。また、そのアンケートの中に「自分の日本人としての民族性に目を向ける契機になった」といった意見も散見され、実行委員側は全く意図していなかったが、在日コリアンたちの民族性に触発され自分たち自身の民族性への自覚も一部促せたようである。



本企画主催の明治大学在日コリアンサークル  
映画上映会実行委員

ただ反省点として、時間配分の不完全さが挙げられる。当日は会場からの質問も多くいた

だき、予定終了時間を大幅に超過してしまった。アンケートにも質問時間不足を指摘する意見が見られ不完全燃焼感がぬぐえない。もっと会場と登壇者たちとの対話の時間もしくは空間を確保する必要があっただろう。





## 他機関との連携・協力



いろいろな意味での多様性を指す。本イベントは二部で構成された。第一部では、国内外で活躍する金融企業から、りそなホールディングスの東和浩社長、野村證券の鳥海智絵専務、メリルリンチの笹田珠生社長といったトップ 3 名を招聘し、各企業のダイバーシティ・マネジメントの取組について各 25 分間、計 1 時間半の連続講演を行った。また講演前には、牛尾ゼミナールの 3 年生が企業紹介を兼ねて 5 分間のプレゼンも行った。続く第二部では、筆者のファシリテートによるディスカッションを実施した。その際、各講演者が注目した女性活躍や働き方改革、機会均等に焦点をあて、より踏み込んだ議論を展開した。さらに、ディスカッションの最後には、各講演者から学生に向けてエールが送られた。総じて、本イベントは形式・内容共に現代の日本におけるダイバーシティ・マネジメントをより理解し、今後実践する上での指針ともなる充実した事業となった。さらに、学生たちは企業研究を重ね、プレゼンの改良や本イベントの運営について試行錯誤を繰り返す過程で、著しく成長した。その意味でも、本イベントは学生に対する教育的効果があったと言える。

なお、来訪者数はのべ 230 名強で、第一部のゲスト 3 名による連続講演では、192 人収容のグローバルホールが、いずれも立ち見が出るほど盛況であった。

■共催

「SOGIの多様性に関する学長共同宣言」+1：成果と課題を議論する


主催：国際基督教大学ジェンダー研究センター

共催：LGBT法連合会，明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

日時：2020年1月11日（土）11:00～15:30（開場 10:30）

会場：国際基督教大学三鷹キャンパス ダイアログハウス国際会議室

# 「SOGIの多様性に関する学長共同宣言」




成果と課題を議論する

2018年4月、津田塾大学、明治大学、国際基督教大学の学長は連名で「SOGIの多様性に関する学長共同宣言」を発表し、個人の尊厳の尊重と多様性を認めあえる大学づくりを進めることを確認した。この1年間、大学においてどのような変化や取り組みが見られたのだろうか。そして、全ての大学構成員（学生・教職員）にとって過ごしやすいキャンパス環境づくりの課題とは何か議論する。

**国際基督教大学 ダイアログハウス国際会議室**  
**2020/1/11（土）11:00 開始（10:30 開場）**  
**日本語（通訳なし） 無料・予約不要**

<プログラム>第1部：11:00～12:30 「共同宣言から1年：成果と取組」  
 ・高橋裕子学長（津田塾大学）・土屋恵一郎学長（明治大学） ・日比谷潤子学長（ICU）（五十音順）  
 第2部：13:30～15:30 「全ての大学構成員の環境整備」  
 ・明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター ・LGBT法連合会  
 ・ICUジェンダー研究センター ・学生団体

16:00～17:30 LGBT法連合会主催「書籍『日本と世界のLGBTの現状と課題』出版記念パーティー」



**LGBT法連合会**

**Contact: Center for Gender Studies**

E-mail: [cgsc@iccu.ac.jp](mailto:cgsc@iccu.ac.jp) Website: <http://www.iccu.ac.jp/gcgsc/> Twitter: @CGS\_ICCU Facebook Page: CGS ICU  
 181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2 国際基督教大学 教育研究棟 (5R-1) 301 神奈川大学三鷹キャンパスから  
 Tel: (+81)422-33-3448 Fax: (+81)422-33-3789 Opening Hours 12a.m.-4p.m. 小田原ICU国際基督教大学 三鷹キャンパス国際会議室



■共催

明治大学大学院情報コミュニケーション研究科特別講義  
「Advertising and Gender Representation」

主催：明治大学大学院情報コミュニケーション研究科

共催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

協力：明治大学国際連携本部

日時：2020年1月24日（金）17:30～19:30（開場 17:15）

会場：明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント 3階 4031 教室

 Graduate School of Information and Communication, Meiji University

台湾を代表するメディア研究者・  
ジェンダー研究者による特別講義  
「広告とジェンダー表象」

広告のジェンダー表象研究の理論と方法、  
そして台湾における興味深い広告の事例研究

**Special Lecture**  
**Advertising and Gender Representation**

Speaker



Professor Ping Shaw, PhD  
蕭焱教授  
Director, Institute of Management and Communication  
National Sun Yat-sen University, Taiwan  
台湾國立中山大學管理學院 行銷與傳播系

2020.1.24 Fri.

開場 17:15 開演 17:30  
会場 グローバルフロント 1F・グローバルホール  
参加無料・事前申込不要/英語による講義・質疑応答は通訳あり

主催 明治大学大学院情報コミュニケーション研究科  
共催 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター  
協力 明治大学国際連携本部

■後援

**2019年度 名古屋 LGBT 成人式**

主催：特定非営利活動法人 ASTA

共催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

日時：2020年2月8日（土）13：00～16：00（12:30 開場）

会場：名古屋能楽堂会議室

■国際交流事業

第6回ジェンダーフォーラム

**10th Anniversary Symposium of Gender Center "Diversity and Creativity in the 21st Century: New Directions in Science, Art, and Fashion -Special Session: Gender Studies in Asia"**

主催：シーナカリンウィロート大学（タイ）、

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

日時：2019年9月19日（木）10:00～16:00

会場：明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント 17階 C5会議室

参加者：高馬京子，田中洋美，細野はるみ，山口生史，その他，本学情報コミュニケーション研究科院生

**報告：田中 洋美（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）**

本センターは2011年からタイのシーナカリンウィロート大学のジェンダー研究者と学術交流を行ってきた（2011年，本センターにてタイ社会とジェンダーに関する特別講演会を実施）。2013年，これにクマウン大学（インド）が加わり，タイ，インド，日本の3カ国で交互に学術フォーラムを開催し，アジア域内での学術交流を推進してきた。2019年は，通称ジェンダーフォーラムと呼ばれるこの国際交流事業の締めくくりとして本学にて第6回会合を開催した。

これまでの会合は下記の通りである。

- ・ 第1回ジェンダーフォーラム（於・クマウン大学）：Asia-Pacific Gender Studies Conference: Gender Equity: Issues of Theory, Practice and Policy in the Asia-Pacific Region, Kumaun University, Nainital, 21-24 March 2013
- ・ 第2回ジェンダーフォーラム（於・シーナカリンウィロート大学）：The Interdisciplinary Symposium: Knowledge Construction through the Lens of Social and Cultural Diversity, Srinakharinwirot University, 3-5 November 2014
- ・ 第3回ジェンダーフォーラム（於・明治大学）：International Symposium: Gender Equality and Diversity in The Research Environment, Meiji University, 6-7 November 2015
- ・ 第4回ジェンダーフォーラム（於・クマウン大学）：International Conference: Urban spaces and gender: Exploring gender, marginalisation and equity in urban spaces in the Asia-Pacific, Habitat Center, New Delhi, India, 1-2 November 2017
- ・ 第5回ジェンダーフォーラム（於・シーナカリンウィロート大学）：Special

Session: Media and Information in a Digital Age, The 12th Research Conference, Graduate School, Srinakharinwirot University, 21 March 2019

- ・ 第6回ジェンダーフォーラム（於・明治大学）：Special Session “Gender Studies in Asia”, Gender Center’s 10th Anniversary Symposium: Diversity and Creativity in the Twenty-first Century, Part 1: New Directions in Gender Studies, Meiji University, 19 September 2019

いずれの会合も学術会議と絡めて開催されており、この度の第6回会合は本センターの設立10周年記念シンポジウムの特別セッションとしてシンポジウム前日に行われた。シーナカリンウィロート大学から4名が、また今回新たに参加したチェンマイ・ラチャパット大学からは7名が参加した。

冒頭では本センター長の田中と過去のジェンダーフォーラム参加者であり、本学部の山口生史教授が歓迎の挨拶を行なった。その後、タイとベトナムにおけるジェンダー研究の動向についてシーナカリンウィロート大学の研究者2名がそれぞれ講演した（うち1名はベトナム出身の研究者である）。インドについてもクマウン大学からの参加者に講演を依頼していたが、あいにくの欠席となり、講演が実現しなかった。続く二つのパネルでは、計5本の研究発表が行われた。発表者のほとんどは経済学者であり、タイ経済における女性の労働参加、IT導入とジェンダー、年齢などの社会格差などについて口頭発表があった他、シーナカリンウィロート大学からの参加者によるメディア研究・文化研究の領域に位置付けられる研究発表もあった。テーマはインターネットにおける身体のセクシュアル化についてであった。

全ての発表が終わった後、本国際交流事業開始時のセンター長であった細野はるみ本学部元教授より閉会の挨拶をいただいた。交流のきっかけとなった2011年の特別講演会から数えると8年に渡る本事業が、3つの参加大学を2巡する形で、本学を最後の会場とするこの度の会合で終わることとなった。細野元教授、また冒頭での山口教授の挨拶でも述べられた通り、この度の会合で一つの区切りとなるが、タイ・インド・日本といったアジア地域におけるジェンダー研究者との交流に終わりはないことが確認された。このフォーラムをきっかけに培われたネットワークが今後も続き、さらなる相互交流・理解の推進につながることを願う。



今回参加したシーナカリンウィロート大学、  
チェンマイ・ラチャパット大学、明治大学の一同

# 研究プロジェクト

## A 「組織におけるダイバーシティ・マネジメント」

牛尾奈緒美

今年度は、明治大学出版会から電子書籍『<知>が生まれるコミュニケーション：情報社会におけるダイバーシティ・マネジメント』を出版した。これは同出版会の初の電子書籍であり、10月31日より学内無料配信がスタートしたものである。本書籍は、2018年11月23日に本センターの共催を得て開催した、「明治大学アカデミックフェス 2018」における「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」の連続公演に基づき作成された。ダイバーシティを企業経営の根幹に位置付けている企業5社のリーダーを招聘し講演と質疑応答で展開するセッションを実施したもので、第一生命ホールディングス株式会社・第一生命保険株式会社 渡邊光一郎代表取締役会長、株式会社丸井グループ 青井浩代表取締役社長、株式会社ポーラ 横手喜一代表取締役社長、アクセンチュア株式会社 程近智代表取締役社長、株式会社ミライロ 垣内俊哉代表取締役社長による講演からなり、「はじめに」と「おわりに」には、筆者が、人口減少、情報化、グローバル化といった社会変化に伴い、変革を迫られる日本企業の現状や、企業にとってダイバーシティ・マネジメントが必要とされる意義について詳しい解説を行った。ミライロを除く4社では、女性活躍を出発点にダイバーシティに取り組み始め、のちに障がい者、LGBT、外国人等へと対象を拡大させ、今日ではすべての人材に対して個々の多様性に着目した真のダイバーシティ経営へ舵を切ろうとしていることが明らかにされた。一方、社長自らが障がい者であるミライロは、マイノリティ人材の持つ価値こそが経営の強みとなりうる独自のビジネスモデル、「バリアバリュー」に基づく経営方針を掲げ、新たな視点からのコンサルティング業務で成功を収めていることがわかった。

一方、年齢を軸に多様な従業員の心理面での研究も行った。昨年度、職場のストレスに関する縦断的な調査を約12万人のデータを用いて分析し成果を「コーピングによるストレス反応の改善効果—2年間のデータを用いた縦断的検討—」として産業・組織心理学会で発表（優秀学会発表賞を受賞）したが、今年度は本研究の発展版として、「ソーシャルサポート、スキルによるコーピングの促進効果—複数年データを用いた縦断的検討—」を同学会で発表した。本研究では50歳代、60歳代のシニア世代を対象としたストレスの特徴や改善方法、職域開発を含めたキャリア支援、コミュニティ形成のあり方を検討したが、同世代の女性データも大量に入手できたことから男女別の比較検討を行い、新たな分析視点も加えていく方向で研究を進めている。

## B 「ヤンキーママ」の互助的ネットワークの実態調査

江下雅之／高橋香苗

今日の母親は、子育て仲間のネットワークを活用することで互いに支えあっている。とりわけ 1990 年代に表面化した母親の孤立した育児という問題を母親たちは互助的なネットワークを築くことで解消させていった。しかしその一方で、母親同士のネットワークから疎外される集団の存在もしばしば観察される。その一例に「魔魅威天使 (マミーエンジェル)」という育児サークルが挙げられる。これは母親となった、女性の暴走族いわゆる「レディース」OG たちによって組織されたものである。これは全国に支部をもつ連帯組織となっていくが、なぜこのように育児という共通のテーマだけでは包括されない集団が存在したのだろうか。

一般的なネットワークからの疎外と疎外されたものたちによるネットワーキングの背景には、ほかの母親たちに比べて若年であるということに加えて、彼女たち自身の価値観や表象がほかの母親たちとの親和性が低いものであったことが推察される。1970 年代から 90 年代にかけて「暴走族」や女性のみ暴走族である「レディース」、それらの発展として「ヤンキー」という不良少年少女たちのサブカルチャー集団は登場し拡大した。こうした若者たちは、とりわけ学校文化への不適合が指摘されている一方で特有の価値観をもっていたことが指摘されている。こうした流れのなかで、レディースや女性のヤンキーのなかから子どもを生み母親になる者が出現し、彼女たちは「ヤンキーママ」「ヤンママ」などと呼ばれるようになる。しかし、ヤンキーママに関する学術的な研究事例はほとんどなく、彼女たちがどのような価値観をもち、どのような母親であったのか、その実態は明らかにされていない。

暴走族やヤンキーの文化では、雑誌というメディアが自分たちのメディアとして用いられ価値観の共有の上で大きな役割を果たしていたといわれている。そのため雑誌を資料とすることによってヤンキーママたちがメディアを通じて共有した経験や意識に迫ることができると考えられる。そこで、ヤンキーママを読者に含む雑誌メディアやヤンキーママに関する言及がある資料を用いて、ヤンキーママの実態を探っているところである。本年度は、レディースや女子のヤンキーを中心的な読者とする雑誌『ティーンズロード』を中心に資料の収集に努めた。本誌に代表されるヤンキー向け雑誌は、国立国会図書館や雑誌蔵書を専門とする図書館でも網羅的に収集されているわけではないため、古書流通も活用した。その結果、90 年代の代表的なサブカルチャーであるコギャル (ギャル) 文化に対して反発する行動が確認できたほか、ヤンキー・ファッションの特徴といわれる「悪趣味 bad taste」の具体的な事例を多数確認できた。今後はさらに資料を収集・整理して、ヤンキーママたちが共有した価値観や経験を体系的にとりまとめていきたいと考えている。

## C 「デジタルメディア時代において多様化する「規範」的ファッションとそれを通して構築・伝達されるジェンダー像についての考察」

高馬京子

本プロジェクトの枠組みで二つの活動を行った。一つ目は、別のページで報告した国際シンポジウムにおいてファッションとジェンダーのパネルのコーディネーターである。「衣服は [メディアで] 語られてファッション (服飾流行) になる」と、フランスの記号論者ロラン・バルトが『モードの体系』の中で議論したように、メディア [の言説とイメージ] とは衣服をファッションに仕立て上げる装置といえる。ファッションとは、性別、年齢、階層、民族、国境といった様々な枠組みを超えて「私になろうとしている私/誰か」を実現するための装置でもある。印刷技術、写真技術の発展などによって、ファッションメディアが人形、ファッションプレートから紙のファッション雑誌へと移行し、交通機関の発展、識字率の向上により広範囲にファッションが伝達するようになった。今日デジタルメディアの発展する高度情報社会において、ファッションはどのように変容したのか。今、ファッションを身につけて私たちはなにならうとする/させられるのか。ファッションメディアは個人にとって多様な自分らしさを提言するエンパワーメント空間になったのか。これらの問いに基づいて、先に報告したパネルセッション：日常、アイデンティティ、メディア\_\_\_\_境界を問うファッションの新地平というセッションをコーディネートし 3 人のパネリスト、ロンドン芸術大学ロンドン・カレッジ・オブ・ファッションのアニエス・ロカモラ氏、クリエイティブディレクター/KLEINSTEIN である小石祐介氏、西オーストラリア大学門傳昌章氏とともにデジタル社会におけるファッション、及びジェンダー像をテーマに議論した。

また、二つ目に個人研究が挙げられる。個人ファッションブログと異なり、ファッション企業、ファッションメディアの声とされていた「企業ブログ」が、フォロワー/読者もコメント、反応を誘われる SNS アカウントに移行しつつある今日、そこでは、ファッション流行、規範的女性像はいかに構築、伝達されていくのかについて事例調査した。それらは、日本とフランスでは差があるのか等の問に対し、検討するために、『ELLE Japon』と『ELLE France』のインスタグラムアカウント空間を事例に、編集者と読者/フォロワーの交差する視線により構築されているファッション、そして、規範的女性性について考察し論文にまとめ 2020 年に『みる/みられるのメディア論』(共編著) の 1 章として刊行予定である。



## D 「現代メディアとアートにおけるジェンダーとダイバーシティ」 Gender and diversity in contemporary media and art

田中洋美

本研究プロジェクトは、デジタル化が進む現代社会におけるメディア（メディアアートなどアートの実践を含む）の変化と現状についてジェンダーおよびダイバーシティの視点から検討するものである。

20 世紀にはマスメディアを中心に発達してきたメディアは今、根本的な変化の只中にある。1990 年代以降一般に普及し始めたインターネットを経て、21 世紀に入るとソーシャルメディアをはじめとするデジタルメディアを通じて、多くの一般市民がメディアの発信者となった。特にこれまで不可視化されてきた女性や様々な少数者のメディア発信やコンテンツ制作などが活発になっており、ジェンダーとメディアの研究者は関心を寄せている。

同様に 20 世紀以降のアートは、様々なメディアを用いたインタラクティブな作品制作などの動きを伴い、ビデオアート、メディアアート、近年はデジタルアートとも呼ばれる新たな表現可能性を追求してきた。直接・間接的に多様性を意識した作品制作も行われてきた面もあり、多様性の理解や受容が声高に唱えられる今、注目に値する。

本プロジェクトでは、ジェンダーや多様性の視点からメディアアートを含め、現代メディア文化の変化と現状を考えた。多様性に真に開かれた社会づくりや文化創造においてデジタルテクノロジーやそれに付随する社会過程と実践においていかなる可能性とリスクがあるのかを検討した。その成果は、今年度の本センター設立 10 周年記念シンポジウム・パート 2 に活かすことができた。



 **業績一覧**

ジェンダーセンター運営委員業績一覧 (各 50 音順)

\*\*\*論文\*\*\*

- 田原里咲・松山真太郎・金本麻里・種市康太郎・川上真史・牛尾奈緒美, 2019, 「ソーシャルサポート, スキルによるコーピングの促進効果—複数年データを用いた縦断的検討—」『第 35 回産業・組織心理学会第 35 回大会発表論文集』, pp.159-162.
- 高馬京子, 2019, 「モードを構築・伝達するディスクール: ゲートキーパーと読者の審級の構築」日本記号学会編 (高馬京子特集編集)『転生するモード: デジタルメディア時代のファッション』新曜社.
- 高馬京子, (近刊), 「デジタルメディア時代のファッション」松本健太郎・高馬京子編『みる／みられるのメディア論』ナカニシヤ出版.
- Kyoko Koma, forthcoming, "Construction of kawaii as an Idealized Femininity in the Context of Fashion in Modern Urban Japan." D.U.Joshi, Ch.K.Permpoonwivat and H. Tanaka(Eds.), *Gendered cityscapes: Revisiting questions of gender identity, equity and marginalisation in urban Asia*, Jaipur: Rawat.
- Kyoko Koma, forthcoming, "Japanese Women in Popular Culture", K. Ross, et al (Eds.), *International Encyclopedia of Gender, Media, and Communication*, Hoboken, NJ: Wiley-Blackwell.
- 高峰修, 2019, 「男性学からみたスポーツをめぐる『女性の商品化』問題」『スポーツ社会学研究』27(2), pp. 17-27.
- 田中洋美, (近刊), 「みる／みられるの政治学—視線・監視・ジェンダー」高馬京子・松本健太郎編『みる／みられるのメディア論』ナカニシヤ出版.
- Tanaka, Hiromi, forthcoming/scheduled 2020, "Japanese manga." K. Ross, et al. (Eds.), *International encyclopedia of gender, media and communication*, Hoboken, NJ: Wiley-Blackwell.
- Tanaka, Hiromi, forthcoming, "The sexualization of women and men in Japanese urban media." D. U. Joshi, Ch. K. Permponwivat, and H. Tanaka. (Eds.), *Gendered cityscapes: Revisiting questions of gender identity, equity and marginalisation in urban Asia*. Jaipur: Rawat.

\*\*\*著書\*\*\*

- 明治大学アカデミックフェス実行委員会編, 牛尾奈緒美・他著, 2019, 『<知>が生まれるコミュニケーション: 情報社会におけるダイバーシティ・マネジメント』明治大学出版会. (電子書籍)
- 日本記号学会編 (高馬京子特集編集), 2019, 『転生するモード: デジタルメディア時代の

ファッション』新曜社.

- 松本健太郎・高馬京子編, (近刊), 『みる／みられるのメディア論』, ナカニシヤ出版
- 高峰修, 2019, 「『スポーツ指導者のスポーツ経験とスポーツ観に関する調査』結果報告」  
公益財団法人日本スポーツ協会スポーツ医・科学専門委員会, 『平成 30 年度日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究報告 I スポーツ指導に必要な LGBT の人々への配慮に関する調査研究 第 2 報』公益財団法人日本スポーツ協会, pp. 23-29.
- 高峰修, 2020, 「オリンピックとジェンダー」後藤光将編著『オリンピック・パラリンピックを学ぶ』岩波書店, pp. 141-157.
- 高峰修, 2020, 「女子マラソン」井上俊・菊幸一編著『よくわかる スポーツ文化論 改定版』ミネルヴァ書房, pp. 58-59.
- 高峰修, 2020 (3 月末刊行予定), 「東京 2020 オリンピック開催に向けたスポーツ政策における女性アスリートの身体: 『女性特有の課題』としての生殖機能の保護と管理」, 日本スポーツ社会学会編『2020 東京オリンピック・パラリンピックを社会学する』創文企画.

**\*\*\*コラム・エッセイ・取材記事・講演録等\*\*\***

- 牛尾奈緒美, 2019, 「一括採用 vs 通年採用」論を超えて—大学から見た新卒採用のかたち『ヒューマナーズレポート』, 2019 年第 22 号, pp.80-85.
- 田中洋美, 2019, 「コミュニケーションのジェンダー問題—旧来の, そして新たな課題」『女子体育』2019.12.1.
- 田中洋美, 2019, 「ジェンダーとコミュニケーション」『IKUEI NEWS』2019 年 10 月号 Vol. 88, pp. 11-12.
- 田中洋美, 2019, 「ジェンダーとメディア研究が問う社会と人間のありよう」『明治』2019 年 4 月第 82 号, pp. 38-39.

**\*\*\*学会発表・報告\*\*\***

- 牛尾奈緒美, 2019, 「働き方改革に経営学はどう応えるのか～日本人の働き方の過去・現在・未来を考える～討論者」, 日本経営学会第 93 回大会 統一論題②, 関西大学, 2019 年 9 月 5 日.
- 田中洋美, 2019, 「身体の構築と表象～多様な身体とスポーツを考えるために」, 日本スポーツとジェンダー学会第 18 回大会シンポジウム, 松本大学, 2019 年 6 月 29 日.

**\*\*\*講演\*\*\***

- 牛尾奈緒美, 2019, 「基調講演: ウェルビーイングなキャリアの作り方: アナウンサー, 専業主婦, 副学長, 変化する自分を見つめて」, 日本女性ウェルビーイング学会第 3 回総会, 於主婦会館プラザエフ, 2019 年 10 月 5 日.

**\*\*\*2018年度年次報告書未掲載分：著書\*\*\***

- 高峰修, 2019, 「『スポーツ指導者に求められる指導上の配慮に関する調査』について クロス集計結果」公益財団法人日本スポーツ協会スポーツ医・科学専門委員会『平成 29 年度日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究報告Ⅱ スポーツ指導に必要な LGBT の人々への配慮に関する調査研究 第 1 報』公益財団法人日本スポーツ協会, pp. 75-91.
- TAKAMINE Osamu, 2018, "Women's sports in Japan: enters a period of change", Molnar, Amin, Kanemasu, (Eds.), *WOMEN, SPORT AND EXERCISE IN THE ASIA-PACIFIC REGION: DOMINATION, RESISTANCE, ACCOMMODATION*, Routledge, pp. 173-187.
- 高峰修, 2018, 「スポーツ政策 韓国」飯田貴子・熊安貴美江・來田享子編著『よくわかるスポーツとジェンダー』ミネルヴァ書房, pp. 90-91.
- 高峰修, 2018, 「スポーツ政策 オーストラリア」飯田貴子・熊安貴美江・來田享子編著『よくわかる スポーツとジェンダー』ミネルヴァ書房, pp. 92-93.
- 高峰修, 2018, 「暴力」飯田貴子・熊安貴美江・來田享子編著『よくわかる スポーツとジェンダー』ミネルヴァ書房, pp. 120-121.
- 高峰修, 2018, 「体力観の形成とジェンダー」飯田貴子・熊安貴美江・來田享子編著『よくわかる スポーツとジェンダー』ミネルヴァ書房, pp. 158-159.
- 高峰修, 2018, 「量的調査」飯田貴子・熊安貴美江・來田享子編著『よくわかる スポーツとジェンダー』ミネルヴァ書房, pp. 202-203.

## ジェンダーセンター運営委員一覧

○委員長

田中 洋美

○副委員長

宮本 真也

○学部内運営委員

牛尾 奈緒美

江下 雅之

施 利平

高馬 京子

○学部外運営委員

高峰 修（政治経済学部）

藤本 由香里（国際日本学部）

○学外運営委員

出口 剛司（東京大学）

細野 はるみ（前ジェンダーセンター長）

## ジェンダーセンター運営委員会会議録

第 1 回運営委員会 2019 年 4 月 19 日

第 2 回運営委員会 2019 年 5 月 24 日

第 3 回運営委員会 2019 年 6 月 14 日

第 4 回運営委員会 2019 年 12 月 13 日

第 5 回運営委員会 2020 年 2 月 19 日



## 編集後記

台風、大雨、まだ先が見えない新型コロナウイルスの感染拡大というように、自然の脅威に翻弄された一年であった。自然現象は実のところ、平等に私たちを苦しめるわけではない。苦痛は、決まって社会のなかの序列の下の方をまず襲い、そこで極大化する。声にならない痛みに耳を傾けることは、今後のウイルスによる被害の拡大を防ぐために大事なことであるだろう。自然的なものは、社会的なものなのである。

ジェンダーセンター運営委員 宮本 真也

2019年度はジェンダーセンター10周年であり、ジェンダーセンターも一つの節目を迎えた年であった。2019年を振り返ってみても、ジェンダーセンター10周年にふさわしく、充実したジェンダーセンターの行事、活動が、9月、11月の国際シンポジウムをはじめ、定例研究会、上映会、学生企画、他機関との連携、国際交流事業、イベント、上映会後援という具合に多く開催された年であった。ご担当された運営委員の皆さま、ご登壇された皆さま、支えてくださった事務の皆さま、ご来場くださった皆さま、皆で作上げた諸活動であったと思う。私個人はジェンダーセンターの歴史の後半半分弱しか参加できていないが、2019年のみならず、この10年、設立から関わってこられた皆さまにこころよりお疲れ様でした、そしてありがとうございます、とお礼申し上げたい。そして、これから始まる2020年からのジェンダーセンターの活動も皆さまと共に楽しみにしていきたい。

ジェンダーセンター運営委員 高馬 京子

1929年設置の明治大学専門部女子部は、1950年には明治大学短期大学へと改編され、その後短大を引き継ぐかたちで2004年に情報コミュニケーション学部が設立された。2009年には本センターが「ジェンダーセンター設置委員会」として活動を開始、そこから10年。本学が学問研究における機会均等を掲げ、女性に学びの門戸を開かんとしてからのべ90年を経たことになる。先人達は、学ぶ機会を得ようとするこす承認されず、多様性を一律的に押し潰してきた時代・社会に真っ向から向かい合い学問の場としての礎を築いた。この連綿と続く流れの先陣に立つジェンダーセンターのこれまでの10年の活動を支えて下さった方々に御礼を申し上げると共に、これからも変わらぬご支援を頂ければ幸甚である。

ジェンダーセンター事務局 石田 沙織

 ジェンダーセンター年次報告書 (2019 年度)

- 
- 2020 年 3 月 31 日発行
  - 編集・発行 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
  - 印刷 株式会社プリントパック